

## 年間第19主日

福音朗読 ルカ 12・32-48

2022.8.7

カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

ミサの初めにも申し上げましたけども、8月6日から8月15日までは日本の教会の中で平和旬間、特に平和のことを思い、そして一人ひとりが、そしてわたしたちの社会が今何をしなければならないかをもう一回考える時です。そして東京教区ではこの平和旬間を特に、昨年を引き続いて、ミャンマーの人々のためにお捧げするという意向を大司教様が発表されています。日本の教会とミャンマーの教会はずうっと協力関係にあります。今、ミャンマーでは軍事政権による弾圧が激しくなっているんですけど、ウクライナだったり世界の他の大きなニュースもあるのでどちらかというのと忘れられ去られている。という中で、カトリック教会もいろんな形で圧迫されているわけです。教会を壊されたりとかしています。

そういうわけで、平和旬間、祈りとわたしたちの献金は今年もミャンマーのためにお捧げしましょうという大司教様の呼びかけに応じて、どうぞわたしたちも共に祈りたいと思います。

さて、今日の福音ですけども、イエス様が「擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」(ルカ 12・33-34)とおっしゃっています。富、いろんな宝、良い物。どういうことかなと考えてみたいんです。わたしたちは実際に神様からいろんな良い物をいただいていますね。それは普段いろんな形でわたしたちの生活を助けてくれる物質的な富ももちろん入っていますが、それだけじゃなくて一緒に人生を共に歩んでいる親しい人とか、あるいは一人ひとりのいただいている健康とか知性とかいろんな才能とか、あるいは時間とか、一人ひとりの命はもちろん、そういうものはみんな神様からいただいた富、宝と言っていいわけです。

ただ、それを天に蓄えるのか、天の反対は聖書の中では地ということですが、

地に蓄えるのので意味が大きく変わってくるということですね。天というのは聖書の中では神様の場所っていう前提で語られますから、富を天に積むっていうのは、わたしたちがいただいているいろんな良い物、良いことっていうのを神様との関係で見る、ということが出来ます。

一方で、地っていうのは人間の場所。だから、富を地に蓄えるっていうこともありうるわけです。それは、神様とは関係なく、地というのはどちらかというとなら神様との関係が切れた状態を表現してたりするから、いろんなわたしたちが享受している物を自分が獲得したかのように、あるいは初めから自分が持っているんだというようなものとして、与えられて受け取ったというものではなくて、自分の始めたものなんだというような思いで自分の享受している良い物とか良いことを見る、というのが地に蓄えるというふうに言えるんじゃないかなと思います。

両方のタイプがいます。だけど、地に蓄える人というのは、自分のものだからそれが無くなならないように頑張らなきゃいけない。失うことを恐れるんじゃないかなと思います。自分の幸福は自分が持っている、あるいは自分の物、そういういろんな良い物によって支えられているっていうふうに思ってますからね。

一方で、天に蓄える人は、そういう良い物は神様がくださるんだから、それは、聖書のヨブの言葉で「神は与え、神は取り上げる」(ヨブ 1・21) とあるように、自分のもとからまた神様がお取り去りになることもありうるということは十分分かりながら、だけど不安にならない。なぜならば、そういうものをくれるのは神様ご自身だから。いろんな良い物の与え主である方はいつもわたしたちと共にいらっしゃる。だからこそ、そういう表面的に自分の手元にあるいろんな良いことや宝が自分の元から無くなっても、そこで揺れ動かない。それは信仰による土台です。

わたしたちは、地に蓄えるものと天に蓄えるものの中で揺れ動くというのが現実なんじゃないかなと思います。揺れ動きながら、だけど、やがては自分がいただいているいろんな良いものが、別に命の終わりのときだけじゃなくて、健康でもなんでも移り変わっていくっていう現実、普段は意識しなくても直面しなきゃいけないときが来ますよね、ということをいつも聖書が思い出すように呼び掛けているような感じもします。

皆さんはいろんな神様からいただいた良い物を地に蓄えるタイプでしょうか。

それとも天に蓄えるタイプでしょうか。考えてみると、わたしのことを言えば、やっぱり地に蓄えることが多いなって気がします。自分が満足できるかどうかという基準で生きていることが多いので。それは、例えばいろんな物、物をたくさん持ってるわけじゃないかもしれないけど、物だけじゃなくて、司祭職なんかも、それは神様からわたしに預けていただいている一つの素晴らしい宝なんですけど、だけど司祭であるということも、その与えられた職務で自分が満足できるかどうか、みたいなことで考えちゃう、てことは、司祭職なんかも多くの場合、地に蓄えようとしている。そういうような自分の現実に思い至るわけなんです。悪い人間なんです。

だけど、一方で希望は失わない。そんなわたしでも神様はいつも呼び掛けてくださっている。その呼び掛けは終わることはないんだ。神様はあきらめないんだっていう希望を持ってます。いろんな形で、ミサとか聖書の言葉とか、あるいは他の人の模範とか、そういうようなことで、ご自分のほうへわたしを呼んでいらっしゃる、そういう神様の呼び掛けをいつも感じます。そして、いろいろいただいている物を、失わないように自分の満足のためにしがみつくんじゃなくて、神様と一緒に、どうしてこれが与えられているかな、あるいは、どのようにこれを用いることが神様の望みかな、って一緒に考えようというふうに呼び掛けている、その呼び掛けは感じています。あとはそれに応える信仰が弱い。それが一番大事かもしれないけどね。

だから、皆さん、もし自分を振り返ってみて、自分はいつも神様と共にいるなという気がするならば、それは本当に素晴らしい。神に感謝なんです。それも恵みとして感謝しましょうね。一方で、わたしのように、自分の満足のために、あるいは地に蓄えちゃう、そういう傾向があるならば、やっぱりこのミサを通して神様の呼び掛けを聞き分ける心の耳、そしてそれに応えて行く信仰、恵み、支えを願いたいと思います。

神様はいつもわたしたちと共にいらっしゃる。いつも呼んでいらっしゃる。その呼び掛けを思い起こしながら、いろんな形で今神様を通していただいている良い物を思い起こしながら、感謝のうちにこのごミサをお捧げしたいと思います。